

カント教育哲学序説——素質について——

澁谷 久

カントの哲学思想を教育学の見地からみた場合に、それはいかなる様相をもって現れるであろうか。筆者はここ数年來この問題に関心を寄せ、カントの教育哲学なるものの体系が存在するのではなからうかと秘かに期待しつつ、彼の著作を渉猟してきた。カントの哲学を人間学と看なす解釈が江湖に現れている事実から更に一步進んで、教育の本質に迫るものを彼の哲学に見出すことは必ずしも困難ではないであろうと、当初から筆者は予想していた。果して、教育の何たるかをわれわれに明示し、あるいは示唆するものが、カントの教多の著作に散見するのである。教育学に関する著作を別にすれば、とりわけ人間学や倫理学に関するものに、教育哲学の核心を構成し得る契機が認められる。

教育をどのように論じようとも、それはつまるところ人間による人間の教育のことであるから、教育哲学は先ず人間の考察から出発しなければならない。もとより人間の考察はさまざまな観点からなされ得るが、教育哲学における人間の考察は陶冶 (Bildung) という観点からなされなければならない。陶冶性のないところに教育は存在しない。教育という極めて自覚的な人間の営為は人間の陶冶性をおのれの前提として有するのである。陶冶とは人間に存する潜勢的能力を現勢的能力に変える営みの謂である。そして潜勢的能力とは素質 (Naturanlage od. Anlage) のことにほかならない。教育にあっては人間のおかれている環境もさることながら、人間の有する素質もそれに劣らず重要な意味を有する。素質を無視した環境論だけに依拠して教育を論究するならば、その論究は空虚なものに終るであろう。

翻って考えてみるに、カントの哲学では何よりも先ず人間の心的能力が大きな問題であった。このことからして必然的に人間の素質が哲学的考察の対象になったのである。そもそも人間の素質は

形而上学と不可分の関係にある。カントによれば、学としての形而上学の成立が問題であるとしても、素質としての形而上学は現実的である。およそ素質は人間の心性の本質を成すものであり、それは常に完全性を求めて自己を顕現しようとする。素質は常に経験を越えようとする。すなわち「この素質が目ざしているのは、われわれの概念を経験の束縛と単なる自然考察の制限とから解放することであり、しかもこの解放は、少なくとも、感性にとって到達不可能であるが純粹悟性にとって単に対象であるものを含む一つの領域が、自己の前に現れているのがわれわれの悟性に見える程度に、なされる⁽¹⁾」のである。

人間の悟性にあらかじめ潜んでいる素質は経験を機縁として展開し、まさしく悟性によって経験的制約から解放されて自己を顕現するのである。素質は心性の基礎に横たわっている。このことは、とりもなおさず素質が先天的であることを意味する。先天的な素質は経験を機縁として展開するのである。このことはわれわれの認識の成立との Analogie において理解される。カントによれば、あらゆる認識は経験と共に始まる。「だが、われわれのあらゆる認識が経験と共に始まるにせよ、それだからといって、われわれの認識がすべて経験に由来するというわけではない⁽²⁾。」ここでカントは認識における das Apriori と das Aposteriori との関係を端的に物語っている。素質の展開における das Apriori と das Aposteriori との関係は認識におけるまさに両者の関係と同じである。認識が das Apriori と das Aposteriori との統一であるように、素質の展開も両者の統一に求められる。

ところで、カントにあっては素質は幾つかの観点から論じられているが、われわれは以下で素質を教育哲学的ないし教育学的な観点から考察することにしよう。われわれが教育を論ずる場合に、

まさに教育という概念は極めて包括的な内容を有する。カントの教育学にあっては、教育は一方では System として論じられ、他方では Genesis として論じられる。教育が一つの System として論じられる場合に、それは通時的ないし歴史的な契機の捨象において問題にされる。これとは対照的に教育が Genesis として論じられる場合に、それは歴史的生成において把握される。更にまた教育は一方において個 (Individuum) をおのれの対象として有し、他方において類 (Gattung) をおのれの対象として有する。われわれは教育とのかかわりにおいて素質を論ずるであろうが、その意図するところは一つには教育を歴史的生成において把握することにある。けだし教育の目ざすところが人間の有する素質の完全なる展開にあるからである。いうまでもなく、素質の展開を望ましい方向へ促すのが教育の使命である。

古来、人間はさまざまに定義され、あるいは規定されてきた。人間を理性的存在と定義するのが、その典型である。しかし、人間は理性のみで律しきれものではない。カント自身もこのことを十分に理解していた。カントの哲学といえは、ひとは「理性」とか「理性的」とかを想起するであろうが、これらの概念はカントの哲学の一面を表すにすぎない。また、それらは畢竟するに人間存在の一部分を表現するにすぎない。人間は理性的存在であると同時に動物的存在である。人間が全き理性的存在であるならば、もはや教育は必要ではないであろう。あるいは人間が単なる動物的存在にすぎないならば、おそらく教育は不可能であるだろう。動物はせいぜい馴致されるにすぎない。「人間は教育されなければならない唯一の被造物である^①」とカントがいうとき、人間は教育され得る唯一の被造物であるということが、その前提とされている。そしてカントの如上の言葉は、人間が理性的であると同時に動物的存在であることの証左である。

カントは『宗教論』において、人間の本性にみられる善への根源的素質について語り、人間の素質を三つに分類している。先ず [1] 「生命体としての人間の動物性の素質^②」が挙げられている。ここでは人間はひとつの動物と看なされている。したがって理性は捨象されている。動物性の素質

は自愛の素質である。もとよりこの自愛は理性を必要としない単に mechanisch な自愛のことである。自愛の素質は何よりも先ず自己自身を維持しようとする素質である。したがってこの素質は先ず個にかかわる素質である。生物学の概念を用いるならば、この段階にあっては人間の主要な営みは新陳代謝であるといえる。しかし、いかなる人間も個としては有限である。動物としての人間は、個として、その生命を無限に維持することができない。一般に生命体において個は自己の生命を種 (Art) に託してのみ無限に生き続けることができるのである。個は個に死して種に生きる。動物としての人間は、性衝動によって自らの種を繁殖させ、交接によって生まれ出るものを維持しようとする素質を有する。この素質は種にかかわる素質である。多くの動物が群れをなすように、人間も動物として群れをなす。人間は他者と生を共にする素質を有する。カントの論述からすれば、群れをなす素質は種としての人間のみならず類としての人間にもみられる。いずれにせよ、この素質は結局、生にかかわる素質である。ただ、この素質はさまざまな形で顕現するのである。ヘーゲルの論理学の概念を援用するならば、個としての人間が有する動物性の素質は生の即自態を表すものであり、これを否定したものが、種としての人間が有する動物性の素質である。したがって種としての人間が有する、この素質は生の対自態を表すものである。類にかかわる素質は如上の二つの素質の統一体である。このような素質は生の即かつ対自態を表すものと考えられる。生に関する素質については、カントの理解はすこぶる弁証法的である。

人間の有する素質は動物性の素質に尽きるものではない。素質には更に [2] 「生命体であると同時に理性的存在者としての人間の人間性の素質^③」がある。この素質は自然的な素質であり、したがって一種の自愛の素質である。しかし、ここでいう自愛は単なる自愛に終るものではない。その深き根底では常に他者との比較が意識されている。この素質には理性も関与しているのである。[1] の素質は人間を単なる動物と看なした場合の素質であるが、[2] の素質では人間の二面性が見れる。しかし、カントの倫理学の立場からす

れば、自愛の内容が何であれ、素質が自愛の素質であるかぎり、人間相互の関係を律するものは適法性 (Legalität) にすぎない。この段階では人間の行為を評価する尺度は「役立ち得るということ」すなわち有用性である。結局、[2]の素質は実践的ではあるが他の動機にのみ役立つ理性を根底に有する⁶⁾。この素質の段階では、いまだ人間は完全なる自由の主体ではあり得ない。人間は、真に自由の主体であるには、更に別の素質を必要とする。

カントによれば、人間には最高の素質として[3]「理性的であると同時に責任能力のある存在者としての人間の人格性の素質⁷⁾」がある。責任能力のある存在者とは自己の行為に責任をもち得る存在者の謂にはかならない。このような存在者の行為の原因は自己自身にある。行為の自発性は責任能力の主体についてのみい得ることである。行為を自ら始めることは意志の自由のもとにおいてのみ可能である。「人格性の素質は選択意志のそれだけで十分な動機としての、道徳律に対する尊敬の感受性である⁸⁾。」人格性の素質は自由の素質であると、いってもよいであろう。自由が存在するところにおいてのみ道徳は可能である。自由はまさに道徳の存在根拠である。理性的存在と看なされる人間の本性は自由にある。人格性の素質は「それ自身だけで実践的な、すなわち無制約的に立法的な理性をその根底に有する⁹⁾」素質である。このような人格性の素質を有する人間の相互関係を律するものはまさに道徳性 (Moralität) である。

結局、人間には三つの素質がみられる。これらの素質をいかに展開するかが教育の大きな問題である。けだし素質の展開が必ずしも望ましい方向に向かうとは限らないからである。[1]および[2]の素質を人間は本来の目的に反しても使用することができるのである。先にわれわれは[1]の素質を個・種・類との関係において論じたが、カントの挙げる獣的悪徳は[1]の素質が悪い方向に展開した姿を表すものである。それは個のみならず種や類にもかかわる。人間が動物性の素質を目的に反して使用したときに生ずる悪徳は、具体的には(a)牛飲馬食、(b)淫蕩、(c)野生的無法である¹⁰⁾。自己保存の素質は時には牛飲馬食に赴き、

種保存の素質は時には淫蕩に陥り、また共同生活の素質は時には野生的無法の状態を呈する。人間が有する動物性の素質は獣的悪徳に趨る危険に常に曝されている。このような獣的悪徳への傾向を阻止するものが、まさに教育である。[2]の素質の段階で問題になるのは他者とのかかわりである。カントが『世界公民的見地における一般史の構想』などでしばしば述べる Antagonismus は、この素質の段階における人間関係を表す概念である。しかし、Antagonismus は単なる敵対関係や不和を表す概念ではない。その目ざすところは究極的には和合にほかならない。もし[2]の素質が目的に反してのみ使用されるならば、Antagonismus は人間相互の醜い抗争関係に終るであろう。本来の Antagonismus の意図するところは、他者との比較・競争を通じて自己を高めることにある。このようにみえてくると、[1]および[2]の素質は結局、端的に言えば可能性のことであるが、それは善への可能性であるのみならず、同時にまた悪への可能性でもある。ただ、カント自身は人間の素質に善への可能性を期待するところが極めて大であった。

ところで、[1]や[2]の素質とは異なり、[3]の素質は目的に反して使用することができない。カントが人格性の素質を一つの特異な素質と称するもの、あるいはこのことを意味するのである。けだし人格性の素質は、目的に反して使用され得ないが故に、まさに人格性の素質と称されるのである。人格性の素質を有する人間の相互関係を律するものは、すでに明らかなごとく、道徳性である。結局、人間はこれら三つの素質を自己自身の構造契機とする複雑な存在と看なされる。「人間にみられるこれらすべての素質は単に(消極的に)善である(これらの素質は道徳律に矛盾しない)のみならず、また善なるものへの素質(これらの素質は道徳律の遵守を促進する)でもある¹¹⁾。」素質はおよそ人間存在にとって根源的なものであり、人間の本性の可能性を構成するものである。さて、われわれは今まで主として『宗教論』に即しながら人間の素質について論じてきたが、カントは『人間学』においても人間の素質について述べている。われわれは次に『人間学』を中心に据えながら、人間の素質について更に論究

することにする。

『人間学』における人間観は『宗教論』におけるそれとはやや趣を異にする。カントが『人間学』で動物性の素質に言及しているか否かは疑問である。思うに『人間学』にあっては人間を他の生命体から区別する徴表ともいべき素質が問題にされているとするのが、一般的な理解であるからである。とはいうものの、『宗教論』で論じられている素質と『人間学』で論じられている素質とは或る面で共通点もみられる。後者で論じられている素質は〔Ⅰ〕技術的素質、〔Ⅱ〕実用的素質ならびに〔Ⅲ〕道徳的素質である。

『人間学』でカントは技術的素質を有する人間を理性的動物と看なしている。もとよりここでいう「理性的」は最広義のものである。人間を他の被造物から区別するものは実に理性である。このことはカントの人間観の核心をなすものであるが、この点に関するかぎり、カントの考えは必ずしも新しいものではなく、むしろ陳腐ですらある。確かに人間は homo sapiens である。この人間規定は最も普遍的である。この規定が『人間学』における人間考察のあらゆる場合の基礎をなしている。まさに問題の技術的素質を有する人間の概念は homo sapiens の下位概念である。技術的素質を有する人間とは homo faber のことである。homo sapiens と homo faber は並列的な同位概念ではない。両者は上下関係を有する概念である。理性を有する人間も理性をそれだけで純粋に働かせるのではなく、工作に結びつけて働かせるのである。すなわち理性は先ず技術と結びついて、その機能を発揮する。技術的素質は端的に身体において現れる。カントによれば、手・指・指先の形態と組織が、理性的動物である人間の技術的素質の現れである⁴⁴。技術的素質は、練達性 (Geschicklichkeit) にかかわるので、練達性の素質とも称され得るであろう。技術的素質は意識と結びつくが、mechanisch な素質であり、この段階で社交性 (Geselligkeit) はいまだ問題にならない。技術的素質の段階では人間はいまだ社会的存在ではない。人間はむしろ他者との交わりを嫌う存在と看なされる。

人間の社交性が問題になるのはむしろ実用的素質においてである。実用的素質は有用性にかかわ

るものである。実用的素質を有する人間は他者とのかわりにおいて問題にされる。それ故に実用的素質は社交性の素質とも称され得る。しかし、『人間学』では人間は元来、非社交的 (ungesellig) であるとされている。非社交性 (Ungeselligkeit) が人間の自然であるとしても、人間が自己の生の向上を意図するのであれば、社交的 (gesellig) にならざるを得ない。非社交的な人間が集団を成すのも、自己の生の維持と向上のためである。カントがしばしば言及する Antagonismus は人間の自然 (本性) であるかも知れない。それは人間の自然の姿における非社交性を表すものであろう。しかし、人間が自然の状態からいわゆる文化の状態へ進展するには、Antagonismus は単なる Antagonismus に終ってはならない。それは社交性と和合を求めての Antagonismus でなければならない。このようにして初めて Antagonismus は非社交的社交性の原理となり得るのである。人間は実用的素質を発揮して初めて「(まだ道徳的ではないにしても) 和合を本分とした、躰のよい存在者⁴⁵」になり得るが、このような人間の相互関係を律するものは適法性である。適法性が支配的な社会にあっては、人間の行為の依拠するところは主観的格率である。それ故に実用的素質は「他人を自己の意図のために巧みに使用する⁴⁶」素質でもある。実用的素質は教化によって展開される。

人間の社会は単なる主観的格率を行為の原理とする社会であってはならない。このような社会が存在し、存続するとしても、それは理想の社会ではない。主観的格率は同時に普遍的立法の原理でなければならない。それには格率が普遍的立法の原理に高まらなければならない。カントが技術的素質と実用的素質のほかにも更に道徳的素質を人間に求めるゆえんもここにある。彼の人間観からすれば、道徳的素質は人間にみられる最高の素質である。それは「法則のもとで自由の原理に従って自己自身ならびに他者に対して行為する⁴⁷」素質である。このような素質を有する人間の相互関係を貫くものは道徳性である。道徳性の素質を有する人間の社会にあっては、他者を自己の目的のために利用することはあり得ない。人間は、人格の主体であるが故に、手段とされることはあり得な

い。人間は相互に目的そのものである。人格と人格との交わりにおいて成り立つ社会は、カント自身はもとよりのこと、現代に生きるわれわれも理想とする社会であるが、このような社会の構成員たる人間の性格は人間性一般の叡智的性格と称されるものである。ここでは今や人間は可想体 (Noumenon) である。しかるに、技術的素質の人間は現象体 (Phänomen) としての人間である。技術的素質と道徳的素質とを媒介するものは実用的素質である。

すでに明らかなごとく、『宗教論』においても『人間学』においてもカントは人間の素質を三つに分けて論じている⁶⁴。これら三つの素質は一方において人間の本性の重層的構造を表すものであり、他方において人間の歴史的発展を表すものである。もとよりここでいう人間は、個としての人間のみならず類としての人間をもさすものである。『人間学』で論じられている素質についていならば、技術的素質は人間を他の動物から区別するものであり、人間の素質の歴史的展開における最初のものである。そして実用的素質は歴史的には次の段階にみられるものである。したがって、当然のことながら、道徳的素質は歴史的には最後に展開する素質である。道徳的素質の完全なる展開はおそらく歴史の完結を意味するものであろう。しかし、まさに歴史の中に存在する人間は歴史の完結を認識することができない。思うに歴史の中に存在しながら歴史を超えることは不可能である。したがって歴史の究極において展開する素質は一つの理念である。果してカントは根源的道徳的素質を一つの理念と看なし、自然を超越したものと考える。それはあらゆる宗教の基礎をなすものである。

ところで、人間は技術的素質の段階から実用的素質を展開する段階に達しても、技術的素質を失うものではない。実用的素質の段階の人間は技術的素質と実用的素質とを同時に有する。同様に道徳的素質を展開する段階に達した人間は道徳的素質のほかにも技術的素質と実用的素質をも自己の構造契機として自己のうちに有する。したがって人間が歴史的に発展することは、人間の本質をなす素質が次第に多重的な姿で展開することを意味する。素質が人間の本性すなわち自然をなすという

ことは、すでに明らかなごとく、素質の Apriorität を意味する。

人間の素質はそれだけでは十分な展開をみせない。人間の素質の展開を促すものはいわゆる経験である。しかし、経験は雑多であり、あまりにも多様である。人間の形成にとって最も有効で最も能率的な経験は陶冶である。陶冶の必要性が叫ばれるゆえんもこの事実にある。人間のもろもろの素質が十分に展開するには、素質のおおのにおおにふさわしい陶冶が必要である。カントの教育学にあっては教育の目的はすでに与えられている。それは素質の完全なる展開にある。したがって教育という人間の営為は素質の展開に関与する意図的行為である。もちろん人間は知らず識らずのうちに環境からさまざまな影響を受けるであろう。これもまた一つの教育である。これがすなわち無意図的教育である。広義的教育は意図的教育と無意図的教育との両方を包括するものである。

われわれは次に素質と教育との関係を論じなければならぬであろうが、それは別の機会に稿を改めて論ずることにする。この小論は筆者が構想するカント教育哲学の、あくまでも序説にすぎない。

註

- (1) I. Kant, Prolegomena zu einer jeden künftigen Metaphysik, die als Wissenschaft wird auftreten können, § 60.
- (2) I. Kant, Kritik der reinen Vernunft, B 1.
- (3) I. Kant, Pädagogik. In: I. Kants Werke, hrsg. v. Ernst Cassirer, Band VIII, S. 457. (以下、本著作集を K. W. と略記する。)
- (4) I. Kant, Die Religion innerhalb der Grenzen der blossen Vernunft. In: K. W., Band VI, S. 164.
- (5) Ibid., S. 164.
- (6) Vgl. Ibid., S. 166f.
- (7) Ibid., S. 164.
- (8) Ibid., S. 166.
- (9) Ibid., S. 166f.
- (10) Vgl. Ibid., S. 165.
- (11) Ibid., S. 167.
- (12) Vgl. I. Kant, Anthropologie in pragmatischer Hinsicht. In: K. W., Band VIII, S. 217f.

(13) Ibid., S. 218.

(14) Ibid., S. 216.

(15) Ibid., S. 216.

(16) 『宗教論』においても『人間学』においても素質は三つに分類されているが、両者にみられる分類方法は必ずしも同じではない。しかし、両者で論じられている素質には相互に一致するところもある。すなわち〔2〕は概ね〔Ⅰ〕に一致し、〔3〕は〔Ⅲ〕に一致すると考えられる。問題は、〔1〕が〔Ⅰ〕に対応するか否かということである。『人間学』で論じられている三つの素質は動物から人間を区別する徴表ともいうべき素質である。したがって〔1〕つまり技術的素質ですらも人間性の素質である。ところが、『宗教論』の〔1〕は、カント自身もいうごとく、動物性の素質であり、それ故に〔1〕と〔Ⅰ〕は全く別のものである。『人間学』では、人間性がカントの主要な関心事であるので、彼は動物性そのものにあまり触れていない。しかし、教育の観点か

らは動物性は人間性との対比において問題にされなければならないものである。『教育学』では、人間は訓練されなければならないとされている。「訓練するとは、動物性が個々の人間においても社会人においても人間性に害になるのを防止しようと努力することを意味する。したがって訓練はただ野性の抑制だけのことである※。」このことからすれば、『宗教論』における〔1〕の素質すなわち動物性の素質は、『教育学』では教育の最初の段階である訓練の対象とされているものである。このように考えると、『人間学』における技術的素質に対応するものは『宗教論』に見当たらないといえる。その理由は幾つか挙げられるが、最大の理由は、宗教では人間の技術的素質が問題になり得ないということに求められるであろう。素質の分類の観点が『宗教論』と『人間学』とでは多少異なるのである。※I. Kant, Pädagogik. In: K. W., Band VIII, S. 464.